

報告

平成二十九年年度 会員発表会

吉田 勝 重

(会員 佐伯市女島)

七月十五日、渡町台地区公民館にて例年の如く研究発表会が実施された。参加者は四十八名。

今年度の研究発表会は、開催日、時刻等を事前に市報で知らせ一般市民の参加を呼びかけた。演題及び発表者は次の通りである。

一、「ふる里における津波の歴史」 野々下 静

二、「鶴見にそんな人があったんか」 阿部 光明

三、「下堅田の歴史」 林 寛

まず、会長より挨拶、今回の発表について話があった。例年二名で実施する発表を、今年度は三名の方にお願した。より多くの会員に発表の機会を与え、会員相

互の研修の様子を知ると共に、一般参加の人々を巻き込んだ史談会活動にしたいという趣旨であった。



会員研究発表会より～佐藤会長挨拶

発表一「ふる里における津波の歴史」

野々下 静

(会員 佐伯市狩生)

最近、私たちの周りでは多くの地震が発生しています。今年六月には震度五の日向灘地震が発生し、南海地震の前触れではないかとも言われ、七月にも震度四の地震が発生しました。

私の住む西上浦・八幡地区では、このような地震に対して日頃より、何らかの対策をたてるべく地域活動として防災についての様々な活動を行っています。

行政組織の各種講演会等も開催され、阪神淡路大震災や東日本大震災に関連して佐伯地方での寶永四年(一七〇七)の地震、「大津波で米水津の養福寺の石段、二段を残す……」「城下では一丈の津波が押し寄せ、養賢寺が大破した……。」等々の講話をお聞きしてきました。

そこで、「私のふる里には、過去、どのような地震・津波の影響があったのか」、史談会員の先輩諸氏にお聞きし調べたところ、以下の三点の資料によって確認

する事が出来ました。

一、八幡地区海崎の松崎家文書(寶永年間と安政年間の大津波の記録)。

二、温故知新録巻三の六代藩主毛利高慶公の日記(西上浦の宮の内・内の浦地区の被害の記録)

三、米水津地区の成松大庄屋文書(代古浦より鶴谷・堅田・木立……の新地大分つづれ……難義致し候……)。

以上の三点によって西上浦・八幡地区における寶永地震・安政地震の大津波の詳細を知ることが出来ました。

一、松崎文書について

八幡地区海崎小野集落に、三百年余り前の寶永元年(一七〇四)の資料が残されています。

これは「松崎家文書」(注一)とよばれる古文書で、表に「寶永元年申七月廿一日帳面改正、萬連年記録帳、九州豊後國海部郡佐伯海崎村 小野元祖松崎五左衛門当代」の記載があります。

これは寶永元年(一七〇四)から享保十三年(一七二七)までの五左衛門の記録です。

その中の寶永四年（一七〇七）の記録では、

〔寶永四丁亥 年
十月四日

一大地しんゆり

四界浪うち 但

し松場より大の

田雁廻り 道ぎ

りにあがり 但

し首山のせぞ

塩越候

尤 首山と 丸

山の間也 但し

昼の九ツより夜

の九ツ迄

塩のみちひ十

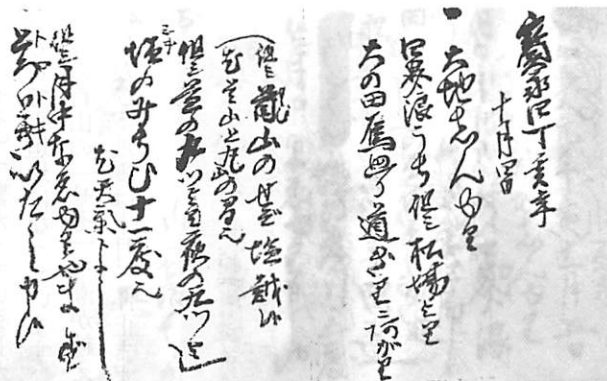
一度也

尤 天氣よし

但し 月中 な

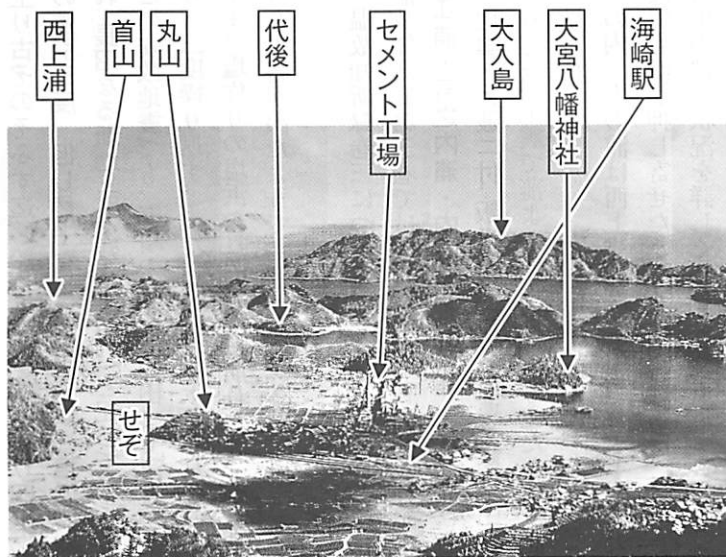
えゆりやまず

とろとき(轟)い



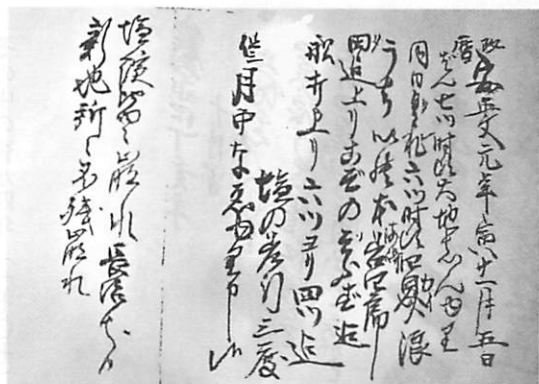
たし申候」と記されています。

小野地区裏山より撮影（S二八年）



この古文書に出てくる「丸山」には、昔「首山古墳」(のちに丸山古墳)と呼ばれる古墳があり、隣の首山地区と「せぞ」で繋がっていました。丸山は現在、切り取られて平坦地になっています。

この首山の「せぞ」を潮が越え、潮の満ち干も十一度及び、地震は十月一杯止まず続いたという。



この寶永の大

地震から百五十年後の安政元寅年(一八五四)十一月五日に大地震が発生しており、松崎文書にその様子も記録されています。

「ばん七ツ時頃 大地しんゆり、同日くれ六ツ時頃 四界浪うち、以能本、海崎長四郎田

迄上り古そのそふぞ迄 船打上り 六ツより四ツ迄 塩の差引三度 但し月中なえゆり申し候 塩浜皆々 崩れ 長沼なる新地 所々残らず崩れ」と記しています。この安政地震でも、海崎の長四郎の田まで津波が上がり、三度繰り返す。また、船が打ち上げられたとあります。塩作りの塩浜や長沼新地が崩れた等、かなり大きな被害が出たようです。

二、温故知新録第三卷について

温故知新録第三卷では、六代藩主毛利高慶の日記に「蒲江浦・宮之内浦・内野浦（いののうら）・片神浦・久保浦、右浦々地震・大波二付、飯米願候二付、借遣せ候」(注二)とあり、この地震で藩より飯米を貸し与えたという記事が見られます。

宮の内・内の浦は西上浦地区であり、寶永年間の大津波でも潮が押し寄せたと記されています。ふるりの被害状況を詳しく知ることが出来ました。

三、米水津成松家大庄屋文書について

米水津の成松庄屋文書には、「佐伯は下浦にて蒲江

浦・丸市尾浦大破に及び申し候、また、中浦は大嶋より蒲戸迄少しも破損なし、代古浦より鶴谷・堅田・木立村迄、新地大分つぶれ申し候て、皆々難義致し候間、大地震致し候えば能く能く心に付け用心有るべく候、且又、火難の節も常々の用心専一に御座候間、其の為書き記し申し候、以上』と古文書に記しています。

この資料によつて、八幡地区にある代後浦の被害状況がわかりました。その対岸は西上浦の小福良区であり同様の被害があつたと察せられます。

また、伝承として八幡の戸穴区に「押上おしあがり」という小字がありますが、いつの時代かの津波に関係した呼び名ではないかと言われています。

西上浦では、二栄古江ふたはげ区に「津波の時、神社境内の大松に船が引つ掛かつていた。」という話も伝えられています。

以上、三点と二つの伝承により、西上浦地区と八幡地区について、寶永四年と安政元年の大地震、大津波がどのような影響を及ぼしたかを知ることが出来ま

した。

歴史を知ることが、未来を知ることに通じると言われています。このふる里を襲った地震と津波の歴史を、私や史談会会員だけのものにするのではなく、西上浦・八幡の全ての人たちにお知らせしたいと思い、同時に多くの市民の皆さん方と共有していきたいと思つています。

寶永大地震から百五十年後に安政大地震が発生し、安政大地震から現在まで、既に百六十年が経過しています。

将来、「南海トラフで起こる地震が、琉球海溝までのびて、超巨大地震になるかどうかが非常に注目されている。」(地下に潜む次の脅威「NHK取材班」と言われています。

この『ふる里における津波の歴史』という私の発表内容が、皆様のことからの防災・減災活動において、少しでもお役に立てば幸いだと思つています。

『まごか』いや『ひよっとしたら』・・・

(朝日新聞コラムより)

注一 松崎文書 松崎五左衛門の記録帳(寶永元年

享保十三年迄)と松崎丈七・寛平の記録帳

(安政元年〜大正二年まで)の記録

史談一六二号に 佐藤巧・御手洗義夫(故)

研究「萬連年記録帳」(一)に詳しく紹介されて
います。

注二 温故知新録第三卷 高慶公御手日記写

三一二〜三一六頁に記載

注三 米水津地区成松家大庄屋文書

発表二 鶴見にそんなんがあったんか

中世 宇戸山砦跡

阿部 光明

(会員 大分市)

私は鶴見町日野浦出身で現在大分に住んでいる阿部
光明です。今回の調査対象の場、中世の砦跡、宇戸

山砦跡付近の山々を小さい頃遊び場として歩き回った
経験がある。

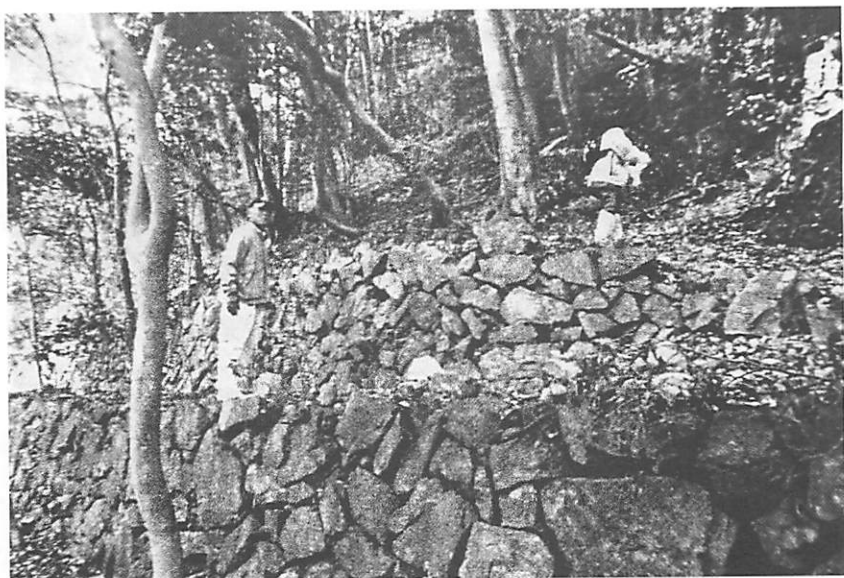
最近、大分県文化課が調査しまとめた「文化財保護
法関連地図」を見る機会を得た。それに日野浦の宇戸
山砦跡(鶴見有明)、立地―丘陵尾根・種別―城跡・時
代―中世・状況―山林の記載があった。

小さい頃の思い出の場は、今どうなっているのか。
という思いで、久しぶりに故郷の地に降り立ち、宇土
山に登ってみた。昔と違い荒れ果てた状態であった。

何とか、ここを「もつ
と景観の良い場所に出
来ないものか」、「人がい
つ来ても安心できる居
場所に出来ないか」と考
え友人、佐藤巧氏に相談
した。

平成二十七年、宇戸山
入口の「伝切支丹墓」付
近から取りかかり、人々
が立ち寄れる場にした。





整備中の宇戸山古道

岩の石垣（上）と堀切（下）



翌年には「かんじん道」と呼ばれていた「宇土山古道」を整備した。入り口が木や草で覆われていたので伐り取り、土を盛り段差を緩やかにし登りやすくした。また、山頂の砦跡の石垣のシダを除去し、崩れた石垣を積み上げ、見晴らしを考えながら木も伐採した。



砦の石垣・側壁



砦中央部の石垣

この宇戸山砦跡は、鶴見町日野浦から桑野浦に通じる旧道沿いにある。海拔三〇メートル余りの尾根に連なった砦跡である。

尾根に続く砦の石垣の高さは一・〇〜一・五メートル余で、砦の出入り口にあたる「虎口」や、南北に延びる石垣が連なっている。長さは七〇メートルほどある。旧道と砦跡の接点には、堀切が残されている。

まだ、この砦跡に隣接する尾根、的場には「キリシタン窟」と呼ばれる毛利高政のキリシタン関連遺跡があるという。付近にある「テンス」「寺屋敷」の名前があり由来なども調べると面白いと思う。

今回の活動で、この「日の浦の宇戸山砦跡」が人々に知られ、多くの地区の人々が参加し、一つの文化財として後世に伝えて行ければと考えている。

なお この宇戸山砦跡については、史談一八二号「遺跡と貴重本について」や、二二三号「宇戸山砦は毛利高政の建てた修道院跡か?」にも記載されているので参考にしていただきたい。



宇戸山古道案内図

発表三 ふるさと 下堅田の歴史

林 寛

(会員 佐伯市下堅田)

一、幕府領となった下堅田

私の住んでいる下堅田地区は、明治八年(一八七五)に堅田村と長良村ながらが誕生し、明治二十二年(一八八九)に合併して下堅田村となった。昭和三十年(一九五五)佐伯市に編入された。現在は十三地区二千八百人(世帯数一二五〇戸)である。

下堅田地区は慶長六年(一六〇一)毛利高政が佐伯に入部した際、佐伯二万石の内、二千石を弟の森吉安に与えている。この吉安が寛永十年(一六三三)三代藩主擁立に失敗して幕府に領地を返上した。下堅田地区が幕府領になった所以である。

幕府領は汐月、泥谷ひじや、波越なみこ、西野さいの、石打、府坂、柏江、津志河内、棚野、床木の十ヶ村で、西国郡代(日田代官)の支配地であった。明治二年(一八六九)まで数回に亘る佐伯藩預かりの時期も含め直轄地として領知された。森吉安は江戸に下り四〇〇石を戴く旗

本になった。その墓は柏江江国寺にある。



森吉安の墓 (江国寺)

明治までの間、佐伯の幕府領と佐伯領との間で、度々、相争う事件が起こっている。

下堅田の中心は、柏江地区で代官屋敷や船問屋があり、千石船等が往来し河口港として栄えた。明治以降数々の暴風雨や洪水、番匠川の土砂の堆積により河口港の機能は失われていった。災害の記録は泥谷の正明寺に記念碑として残されている。

二、歴史の香り高い下堅田

江戸時代、下堅田は柏江港を中心に繁栄し、京・大阪の文化が流入した。その代表的なものとして「堅田踊り」がある。代表的な演目として「与勘兵衛」、「お夏清十郎」、「左衛門」、「思案橋」、「那須与一」などがあり、五十以上の演目が伝えられている。

この堅田踊りは幕府領の村々を見回るお役人を持たずことから始まったと言われている。毎年八月に堅田踊り大会が行われている。扇子と棒を使った優雅で上品な踊りである。



比翼塚－お民半蔵供養塔

その中に、宇山の安藤家の心中事件（注一）を取り入れた長音頭「お為半蔵心中口説」^{くどき}があり、宮崎県との交流がある。音頭や踊りに微妙な差も見られるが、下堅田の文化として後世に伝えたい。

また江戸時代以前は、佐伯氏の所領として知られており数多く石造物、石幢や庚申塔、記念碑が残されている。「西野のお塔」と呼ばれる佐伯惟治やその息子千代鶴を供養した塔などが残されている。



西野のお塔
 榎牟礼合戦で戦死した
 佐伯惟治と息子千代鶴の供養塔



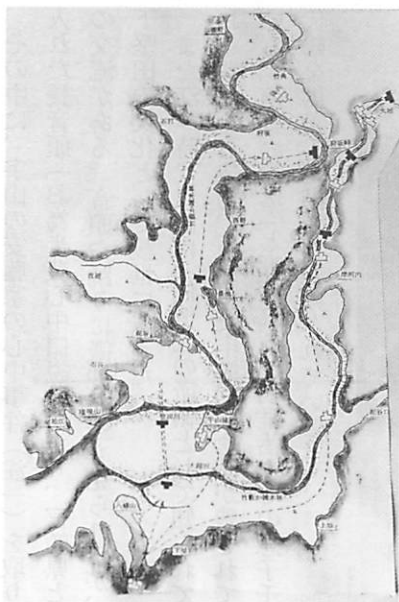
石打地区にある佐伯惟治と千代鶴君の供養塔

三、歴史に名高い二つの堅田合戦

嘉吉元年（一四四二）八月の「中国、大内教弘のりひろによる佐伯侵攻」と天正十四年（一五八六）の「島津家久軍の侵攻」である。

大内の侵攻は、大友氏の家督争いに乗じて豊後の地に勢力を伸ばそうとしたもので、兵船・糧秣・武器補給船など五〇〇艘余りで堅田方面に繰り出した。

この時の梅牟礼城主佐伯惟世これ?（九代）は柏江、堅田の宇山城、八幡山城、長良権現山と連携して大内氏を撃退した戦いである。



天正十四年十一月の島津家久軍の侵攻は、日向侵攻を企て敗北した大友宗麟（義鑑）を攻撃するため北上、当時梅牟礼城主であった十四代佐伯惟定が、岸河内・竹角・長瀬原で迎え撃った戦いである。

これらの戦いの戦死者を祀った供養塔が、府坂三ツ塚や岸河内に残されている。

岸河内荒瀬にある通称「日輪當干塔」と呼ばれるのがそれである。



この他にも「勤王の志士 青木猛比古」の碑（速川神社）や芭蕉の句碑（江国寺）、宝塔、六地藏、庚申塔などが数多く残っている。



青木猛比古の碑（速川神社）

下堅田には、このように古くからの史跡が多く残されている。今後も地域の人々と共に、歴史を掘り起こし後世に伝えていきたい。

残された遺跡・遺物を大切にしていきたいと思う。